

# 公立中学校における「現場の教授学」

——学校区の階層的背景に着目して——

伊佐 夏実

## 【要旨】

本研究の目的は、異なる社会経済的背景をもつ2つの公立中学校を対象にした分析から、「現場の教授学」を形作る要因としての階層文化の影響に焦点をあて、それらと「学校のコンサマトリー化」の関係性について検討することである。

対象となった北中と南中ではそれぞれ、生徒や保護者が異なる特徴をもつものとして理解され、こうした教師の解釈によって「現場の教授学」は構築されている。教師と生徒は互いにより立ち入らず一定の距離を保ちながら、教師による生徒への強制や命令的コントロールは極力避けられるべきものとして捉えられている北中に対して、南中では、教師が主導権を握り、生徒に対して体当たりで勝負することが求められる。ここから、北中では、「コンサマトリー化」と呼ばれる現象が進行しつつあるようにも見えるが、南中では、そうした図式は当てはまらないことがわかる。

このような両校の違いについては、次のように理解することができる。まず、市場化や現代的な人間関係上の規範といったポストモダンな変容を学校にもたらしている社会的要因は、特に中産階級層において浸透してきており、そうした価値が学校に持ち込まれる際に生じる階層差によって、「学校のコンサマトリー化」の進行には違いが生じるということ。さらには、生徒の文化に歩み寄る形で構築される「現場の教授学」の性質が、「コンサマトリー化」を促進する働きをもっているということである。

キーワード：現場の教授学、学校区の階層的背景、コンサマトリー化

## 1. はじめに

1990年代以降の学校を語るひとつのキーワードとして「コンサマトリー化」が挙げられる（伊藤 2002）。学校現場における消費者中心主義が進むなかで、生徒のありのままを受け入れ、より現在志向の強い学校のあり方が模索されており、生徒にとって心地のよい居場所づくりそのものが目的化されつつあると言う。そして、そうした流れは、教師―生徒関係の変容を生み出し、教師の指導実践にも変更を促すことが指摘されている。吉田は、首都圏の公立高校を対象にしたエスノグラフィックな調査から、一見「コンサマトリー化」が進行しているように見える学校内部での教師の指導が、基準を外部化した上での「ぶつからない」統制システムと、「お世話モード」と呼ばれる個別的な対処によって構築されていることを示している（吉田 2007）。また、学校現場において「優しい関係」（土井 2004）を過剰に求める傾向が生み出されつつあり（古賀 2008）、教師が生徒を管理することから撤退し始めていることも指摘されている。

しかしながら、こうしたポストモダンな変容は、現代の公立学校においてどの程度一般的な傾向として扱うことができるのだろうか。公立学校は多様な社会経済文化的バックグラウンドをもつ子どもが集う場所であるため、生徒や保護者のニーズもさまざまであり、そこで構築されている指導の文化もひとくくりにすることはできないだろう。

そもそも、教師が現場で実践を行う上では、公式の教育学的知識だけでなく、個々の学校の文脈に応じた実践的社会的知識が必要とされるのであり、学校が抱える生徒の実態や、校区の状況に対する教師の理解によって指導の型は作られる。すなわち、個々の学校には、「現場の教授学」なるものが存在するのである（古賀 2001）。「教育困難校」の観察を通して古賀は、生徒文化との対立状況のなかで教師たちが、「困難校」という場に応じた教育行為を行っていることを示し、現場の問題に焦点付けて組織化される「現場の教授学」は、授業という場を中心としながらも、学校のなかでの教師の教育行為／職務活動のあらゆる側面をも射程に入れた概念と言える。

こうした観点にたてば、現代の学校あるいは教師の指導実践というものは、学校をとりまく大きな社会的流れのなかに置かれながらも、ローカルな要因による規定を受けることで様々なバリエーションをもつものとして理解できる。そこで本稿では、ローカルな要因のひとつとして学校区の社会経済的背景という変数に着目し、

## 公立中学校における「現場の教授学」

それによって教師の指導がどのように枠付けられているのか検討する。日本において教師—生徒関係や教師の教育行為が語られる際に、生徒の出身階層という変数は抜け落ちる傾向にあり、それこそが、日本の学校の特徴を捉えてきたという見方もある（大和田 2000）。しかし本稿では、生徒の出身階層はそれらを規定する上で重大なインパクトをもつものとして位置づける。

このような関心から考察を進めるにあたって参考になるのが、生徒文化研究における文化葛藤説である。ウィリス（1996）や Webb（1962）の研究では、生徒と教師それぞれの出身階級の差異による葛藤が、学校における生徒の下位文化形成の説明要因として用いられている。また、そうした文化葛藤は、労働者階級出身生徒のみでなく、上流階級出身生徒と教師の間にも生じるものである（Becker 1952）。しかし、日本の職業高校を対象にした竹内（1987）の研究では、労働者階級の生徒が多い学校がすべて文化葛藤によって逸脱行動に支配されているわけではなく、このような学校では教師も生徒も生き残るために、相互にある程度の歩み寄りがなされることが示されている。竹内は、教師による生徒への歩み寄りを「現地化」という言葉で表しているが、ここで言う「現地化」は、「現場の教授学」と同義のものとして捉えられる。

また、本稿の調査対象校でもある南中を20年ほど前に観察した志水は、南中の指導を「つながる指導」と名づけている（志水・徳田 1991）。校内暴力やつっぱりに象徴される1980年代の生徒指導といえば、教師が生徒を強圧的に取り締まるものとして理解されがちであった。しかし、「しんどい学校」として表現される当時の南中の生徒指導は、人間的で情的なつながりを通してなされるものとして描かれている。そして、こうした指導を支えているのが、単純に校則を厳しくすれば火に油を注ぐようなものという校区の実態であり、労働者階級出身生徒が多い南中の特徴が、「つながる指導」というスタイルを教師の間に生み出したと言えるのである。

このようにして見ると、学校が抱える生徒の実態や、校区の状況に対する教師の理解によって指導の型は作られていることがわかる。そして、古賀や竹内、志水によって示されているように、日本における教師—生徒関係を階層・階級の視点から見た場合、確かにそこには生徒の出自による影響が存在しているものの、それは、欧米の議論にみるような対立関係というよりはむしろ、教師の側が歩み寄る形で「現場の教授学」が構築されていると捉えられるのではないだろうか。

そこで本稿では、同じ市内に位置し、異なる社会経済的背景をもつ2つの公立中学校を対象にした分析から、生徒の出身階層に応じて編み出される「現場の教授

学」を明らかにした上で、それらが「学校のコンサマトリー化」に与えるインパクトについて検討することにする。以下ではまず、調査地の概要と研究の方法を2節で、調査対象である2つの中学校において教師によって語られる生徒の特徴、保護者の特徴について3節で述べる。その上で、両校の教師—生徒関係や、指導のあり方を4節で比較検討し、最後に5節でそれらを理論的に位置づけ考察する。

## 2. 研究の対象と方法

### 2.1. 調査地の概要

関西圏にあるA県南部に位置するZ市は、戦前より工業都市として発展してきたところである。人口は近年減少傾向にあるものの40万人程度であり、人口密度の高さは全国でも20位以内に入る。各種統計資料から、Z市の住民特性を簡単にみても、まず「専門・管理・事務」といったいわゆるホワイトカラー層の男性の割合が全国に比べると10%程度低く、持ち家率も全国に比べて10%以上低くなっている。さらに、全日制普通科高校への進学率が全国平均よりも10%近く低く、四年制大学進学者についても若干低くなっている。このようにしてみると、概してZ市はブルーカラー層が多いという特徴をもつ地域であると考えられる。Z市の教師たちは、地域の「しんどさ」についてよく語るのであるが、それは単なる経済的な厳しさだけでなく、単親家庭の多さや文化的環境に恵まれていないことなど多岐に亘る。また、Z市に隣接する各市が、大都市のベッドタウンとしての機能を持ち、ミドルクラス層が多く住んでいることから、そのコントラストはよりはっきりしたものとして意識されている。

以上から、全体としてみればワーキングクラスの町として印象付けられているZ市であるが、南北差があることも知られている。「お金ができると北へ、もっとできると他市へ」。これはZ市の教師から聞かされた言葉であるが、北部には、経済的に豊かな層が暮らす地域も存在している。市内には19の中学校があり、そのうち「キタの学校」と表現されるのは3校である。地理的には北部に位置していても、地域の社会経済的背景を根拠に「キタの学校」とは評されないところもいくつかある。

今回調査対象とするのは、Z市のなかでは比較的ミドルクラス出身者が多くを占める北中と、ワーキングクラス出身者が多い南中の2校である。

北中と南中の就学援助率のみを比べてみると、その差はあまり大きくない。これは、北中校区の小学校に通う子どものうち、私立等の中学校に進学する者が多いと

表1 北中と南中のプロフィール

	生徒数	教職員数	就学援助率	父親の職業 (ホワイト カラー) ※	父親の職業 (ブルーカ ラー) ※	その他
北中	約700名	約40名	25%以上30%未満	58%	15%	校区にある2小学校の児童のうち 約3割が私立・国立中学校に進学 校区に同和地区やオールドカマー 集住地域を含む
南中	約500名	約50名	30%以上35%未満	25%	45%	

※2009年3月に筆者が両校の保護者を対象に行った質問紙調査における、職業欄に対する有効回答数内の割合

いう事情も関係していると考えられる。一方で、南中も就学援助率の値のみで見ればZ市内の全公立中学校の平均とほぼ同程度ではあるものの、「前にいた学校もこと経済的には似てたけど、でもだいぶ違うなあ。この子は家庭環境がホンマに複雑」(南中教師)と語られるように、経済的要因のみならず、社会的文化的に厳しい地域にある学校であると認識されている。

Z市全体がワーキングクラス的事であることから、北中を典型的なミドルクラスの学校としてみなすことは難しいとも言える。しかしながら本研究では、都市化の度合いや教育行政、地域の教育文化など、「現場の教授学」に影響を与えることが予想される要因を統制することで、学校区の階層的背景の差異による影響がより明確になると考えたため、同じ市内に位置する2つの中学校を調査対象地として選定した。

## 2.2. 研究方法

本研究では、エスノグラフィーの手法を用いた分析を行う。筆者は、南中で2006年5月から週に1回程度、北中で2008年4月から隔週に1度の割合でフィールドワーク調査を行っており、両校ともに調査は現在(2010年1月)も継続中である。調査に際しては、朝の登校指導から放課後の部活指導まで観察を行い、授業中の様子や文化発表会などの行事、各種会議や職員室の様子はもちろんのこと、飲み会などのインフォーマルな場における教師との会話などもノーツに書き留めた。また、北中教師5名(2008年8月実施)、南中教師6名(2007年3月実施)を対象に、およそ1時間程度のフォーマルインタビューも実施し、データとして使用している。なお、本文中の教師・生徒・学校名は全て仮名である<sup>(1)</sup>。

### 3. 生徒・保護者に対する教師の認識

#### 3.1. 生徒の特徴

南中と北中の教師それぞれに、生徒の特徴についてたずねてみると、その違いは鮮明に浮かび上がってくる。まず、南中の生徒については、「忘れ物が多い」「基本的な生活習慣が身につけていない」「勉強をしない」「後先考えない行動が多い」といったネガティブな評価とともに、「ひとなつっこさ」「素直さ」という声もよくきかれる。また、南中は、「荒れの御三家」と冗談交じりに揶揄されるほど、これまでも幾度となく大きな「荒れ」を経験してきた学校であり、市内でも有数の「しんどい学校」としてZ市の教師たちに認識されている。そして、生徒が「荒れる」原因を説明する際に南中教師たちが用いる枠組みのひとつに「愛情の欠如」があり、不安定な家庭生活を余儀なくされるため、それが学校で「荒れ」となって現れているのであり、「かまってほしい」子どもが多いとも考えられている。

(他市の教育委員会による学校視察時にされた校長の話)

「生活に忙しい親が多いので、かまってほしい子どもが多いし、かまってくれる先生が好き。打てば打つだけ返ってくるし、打たなかったらそのままという非常に正直な地域です。」 (南中フィールドノート：2009年1月23日)

一方北中も、数年前に大きな「荒れ」を経験しているが、むしろそれは「なぜあの学校が」というような驚きをもってZ市内の教師たちによって語られ、比較的落ち着いた学校として定評がある。したがって、生徒を統制しやすい状況があらかじめ用意されているのは、北中のほうであると考えてよさそうである。しかしながら、次の北中教師の言葉にあるように、生徒の特徴について語る際に教師たちによって肯定的な評価が下されるのは、キタの子どもよりもミナミの子どもたちである。

「キタの子はひとなつっこさがない。ベールをかぶっている。親も子どももお高くとまっているところがある。」 (北中フィールドノート：2008年5月23日)  
 南山中のほうはね、生徒はまあ古い言い方ですが、義理と人情がある。雑やねんけど、雑やねんけど、そういう義理と人情がある (中略) こっちは丁寧やねんけどちょっと人間として冷たいかなという。

(北中：藤田先生インタビュー)

Z市の教師たちがミナミの子どもを言い表すときに使う「義理と人情、ひとなつっこさ」という言葉の対比として、「気取っている、冷めている」などと言う言葉が、北中生の特徴を言い表すときに使われ、自分をさらけ出さず、人間関係に慎重

## 公立中学校における「現場の教授学」

な子ども像が教師によって共有されている。こうした南北の対比は、Z市の教師であるならば、少なからず持っている生徒の違いに対するステレオタイプ的な見方である。

また、次の教師の言葉にみられるように、正直さにかけるという表現からは、大人と交渉する子どもという北中生の特徴も浮かび上がってくる。

ミナミの血が流れてる子なんかは、結構人懐っこくて正直に言うてくれる子もおるけども、結構自分を守るのよね、何かキタの子は、自分をね、と思うのよ、僕は。その、だから悪いことをしたら普通謝るんだけど、まずその防御に入るというね。変な言い方や、言い訳やね。自分はほんとに悪くないんやと。  
 (中略) やったことに関しては素直に謝るといのがね、結構、昔なんか、結構そういうのがあったんやけど。特にキタのほうはそんな雰囲気はあるね。

(北中：橋本先生インタビュー)

「ミナミの子ども」あるいは、「昔」との対比から語られる「キタの子ども」は、教師の指導を素直に聞き入れず、交渉することで自分の立場を優位に持っていこうとする子どもの姿である。

一方で南中の生徒については、「うちの子は権力に弱いからな。担任が絶対やねん」(南中フィールドノーツ：2008年1月23日)と語られる。また、Z市に勤める別の教師からは、「怒ったときに、キタの子は言い訳するか、泣くか、ミナミの子はすぐに謝るな」と表現されることもあった。つまり、いったん教師と生徒の間に力関係が成立すれば、それに従うという傾向がみられるのである。また、次のデータに示しているような場面にもそれは現れている。

(生徒総会についての筆者と西村先生の会話の一部)

「最近では形骸化してきてる。形式を学ぶには良い場やとは思うけど。前の学校  
 のときは、アドリブで生徒の方から質問も一杯出たし、生徒が答えられへん場合は先生が答えたりしてた。『なんで靴下は白じゃないといけないんですか？』  
 とか、絶対出るんやけど。この子はそんなん誰も聞いてこおへん。どうでも  
いいと思ってる。」

(南中フィールドノーツ：2008年6月6日)

「自主性に欠ける」という言葉で表現されることもある、こうした南中生の特徴は、制度に対する疑問を交渉によって解決しようとはせずに、外部の権威に同調しやすいかれらの姿を示していると考えられる。以上のように、南中と北中の生徒の特徴として、ひとなつっこさや正直さといった言葉で語れるような違い、あるいは、大人との関係性の持ち方の違いが存在するとして教師によって認識されている。

### 3.2. 保護者の特徴

谷川先生：「ほか、何かありませんか？」

内田先生：「体育大会の入場のことなんですけど、男女の並びをどうするか。  
またクレーム来ると困るんできっちり決めといたほうが良いと思うんです。」

谷川先生：「どうでしょうか？」他の先生たちに意見を求める様子で見回す。  
(他の教師からは特別な意見は出ず、しばらく沈黙が続く。)

谷川先生：「個人的には、1回やってみてから考えたらいいかなって。」

内田先生：「いや、やってみてからでは遅いんでね。はじめから決めておかないと。」  
(北中フィールドノーツ：2008年5月23日)

これは、筆者が北中でフィールドワークを始めたばかりのころの、朝の職員会議でのやりとりの一部である。キタの学校では特に、「クレーム」と呼ばれる形での保護者から寄せられる学校に対する要求が、ミナミの学校に比べて格段に多く、その中でも北中は「Z市一、朝の電話が多い学校」とも言われている。そのため教師たちは常に、保護者からの要求にかなりの程度配慮しながら教育活動を行わなければならない状況に置かれている。

また、保護者と接する上で気をつけている点について筆者が尋ねた際に、「言葉遣い」と答えた橋本先生は、「少しのけがでもやっぱりすぐに連絡をしたりとかね。まあ、いうたら手落ちがないようにしておかないと、1つのことで信頼が崩れていく場合が多々ある」(北中：橋本先生インタビュー)と語り、「攻撃」を受けないための「防御策」に細心の注意を払っている様子がうかがえる。

また、北中生の特徴と同様保護者の方も、教師の出方をうかがいながらなかなか本音を出さないといったことも語られる。

(前任校であるミナミの学校での経験を振り返りながら)

(南森中では) ここに比べると、保護者の方も何かざつくばらんところがあって、言うときは言うで、というようなことはあったと思うんだけど。あの一、どういうのかな、裏がないというか。こんなこと言うて、ちょっと探ってみたらとかいうのは、何かまあ、ないような、なかったような気はします。  
うん、で、あまり子どもに関心、こんなこと言うと怒られるかもわからんけど、関心が、熱がというか、期待がというか、もうひとつつけてないような、なるようになったらええやないかというふうな部分が何かあるから、余計子どもたちが伸び伸びしてるのかどうかわかりませんが、その印象はあります。

(北中：田村先生インタビュー)



## 公立中学校における「現場の教授学」

田村先生の語りには、子どもの教育に対する保護者の関心の高さが、学校に対するさまざまな要求に結びつくものであることが示されている。一方の南中では、親からの要求はそれほど多くない。特に、「キタの学校」から来た教師にはそのように感じられている。もちろん南中でも、保護者からの「クレーム」がまったくないわけではないが、他の学校に比べると少ないほうであり、特に、授業や成績に関する要求がなされることは稀である。これは、南中の保護者が子どもの学業達成に対してあまり関心が高くないということにも関係しているであろう。

しかし、学業面での指導だけでなく生徒指導の面でも、北中のような学校に比べて、保護者に対する説明責任を教師が感じることは少ない。たとえば南中では、体操服などの忘れ物を家までとりに帰らせることになっているのだが、事故などが起こった場合の危険性から、このような措置をとる学校はZ市内においてもほとんどなくなっている。また、次の例にみるような「体罰」とも取られかねない指導が、暗黙のうちに許容されている側面からもそれはわかる。

(筆者) 朝の登校指導、結構厳しいですね？

(富山先生) 厳しいな。25分で、チャイム鳴ったら書かしてるからね。あれ厳しいな。だってこっちの門はいいねんもん。でも、そないそれに文句言う子もおらへんからおもろいけどね。毎日怒られて毎日書かされて。田中祐樹って、宮西先生に一回遅れたら腕立てとか腹筋とか、最初10回やったんが50回、100回なって。教室入ったら汗かいて、「お前何してんねん」って言うたら、「いや、やってました」って。「体罰やろっ！」て言う人もおらへんし、おかあちゃんも喜んでくれてるし。わけわからんわ。 (北中：富山先生インタビュー)

正門から登校してきた生徒にのみに適用される遅刻のペナルティに対して、生徒からも保護者からも疑問の声があがらないことが、「おかしさ」として語られながらも、許容されている様子が見える。また、別の事例として「生徒から没収した携帯電話を担任教師が1ヶ月間預かり、最後のほうには返してもらえないと子どもも諦めていた」というエピソードなどもあり、南中の場合、学校内での教師の指導が保護者に対するアカウントビリティの必要性に追われている様子は、ほとんどみうけられないのである。

また、キタとミナミを比較する際にしばしば言及されるのが、親子関係の違いについてである。

南中は、親子の地位関係がはっきりしている。お父ちゃんに力で勝てない。乗り越えられない。親が「学校行かせません！」って言ったら絶対やから。北岡

中は、親が子どもに振り回されてオロオロしてる。

(南中フィールドノーツ：2007年10月12日)

「私なんてミナミの方にずっといたから、あっちの子は正直やしすぐ分かる。  
顔に書いてあるやん！って。でもこっちは、途中まで認めても、後は知りませ  
ん、忘れましたって言う。こっちも犯人扱いできひんし、親呼んで話すにも、  
「～みたいなんですけど……」としか言えへんやん？そしたら、最終的には  
「わが子を信じます」ってなる。えーって。SOSのサイン出てるやんっ  
て。だから、2重3重にもベールかぶらなあかんし、しんどいと思うわあ。正直  
に来てくれたこっちも関係もちやすいんやけど、なかなかねえ」

(北中フィールドノーツ：2009年9月25日)

肉体的な力で勝る父親の意見が絶対である南中に対して、北中では、子どもの意向に親が振り回されている様子が見える。もちろん、南中の保護者がすべて肉体的な暴力によって子どもを統制しているわけではないだろうが、親子の地位関係をはっきりとさせた上で、しつけが行われる傾向が南中のほうでより強いという予測はされる。そして、先に挙げた、大人と交渉するのか、あるいは外部の権威に同調する傾向が強いのかといった南中生と北中生の差異は、こうした親子関係の違いによってもたらされていると理解できる。

以上でみてきたように、北中と南中では、生徒や保護者が異なる特徴をもつものとして教師によって語れている。ではこうしたことは、学校のなかでの教師の指導に、いかなる違いとなって現れているのだろうか。

#### 4. 「現場の教授学」のちがい

##### 4.1. 教師——生徒関係

「ひとなつっこく、素直で、かまってほしい子どもが多い」と表現される南中では、教師と生徒の距離が近く情でつながる関係が求められ、人間的なかわりを多く持つことが、南中教師としてのふさわしい姿であることが強調される。

「お前ら」、って先生よく言うんやけど、この間も「お前」って言わんといてって怒られました。でも、「君たち駄目だよ」って気持ち悪くない？「お前ら！あかんやろ！」のほうが良くない？言い訳するけど、「お前ら」っていうのは、お前らみんな家族やぞっていう、近い存在やと思ってるってことやしな。

(南中フィールドノーツ：2008年4月18日)

これは、1学年の集会時に、学年主任の浜村先生が生徒たちに向けた言葉である

## 公立中学校における「現場の教授学」

が、南中の教師は、生徒を「お前」と呼ぶことが多い。それは、生徒を厳しく問いただすときだけでなく、授業中のふとしたやりとりの中でも使われる言葉である。南中教師にとって「お前」という表現は、生徒との近い距離感を示す言葉として理解されているようである。

一方北中で見られる教師—生徒関係は、教師と生徒という制度的役割を逸脱しない、比較的ドライな関係性と言える。たとえばそれは、授業後、教師に話をしにいく生徒が南中に比べて少ないというところにも現れている。先に示した、「正直に来てくれたらこっちも関係持ちやすいんやけど」という北中教師の言葉からもわかるように、「子どもが何を考えているのかわからない」なかで、もどかしさや無力感を感じながらも、少し距離を置いた関係をとらざるを得ないといった状況がある。

また、「ベールをかぶった子ども」たちに対する北中での教師の指導は、言葉遣いや言動なども含めて、生徒に対してある程度気を使うものである。たとえば、授業中の教師と生徒のやりとりは、個々の教師のキャラクターにもよるが、丁寧な言葉遣いであることが多い。そして、生徒を注意する際も、生徒が傷つかないように教師が配慮している様子がうかがえる。

(練習問題を各自で解くように指示がされた後の様子)

竹下君が、席を移動し、他の男子生徒の机の横に椅子を並べ、練習問題を手伝っている。しばらく机間巡視をしていた久賀先生が近づいていく。

久賀先生：「竹下君、ごめんな。せっかく教えているのに申し訳ないけど、自分の席にもどってくれるかあ」と、笑顔で声をかける。

竹下君はしぶしぶ自分の席に戻る。(北中フィールドノート：2009年6月5日)

それに対して南中では、教師が生徒を傷つけないように気を使っているという様子はあまり見られない。授業中の教師と生徒のやりとりも、南中の場合は、生徒をけなしたり、いじったりしながらコミュニケーションをとるといったことがよくみられる。たとえば、熱があるので早退しようと職員室にやって来た女子生徒に対して、「そんな短いスカートはいてるから風邪引くねん。」「そうやそうや」と、その場にいた教師数名で生徒をからかう姿などはよく目にするものである。また、次のような授業の光景も、南中では珍しくない。

(授業の始めに、単語テストの用紙が配られた後の様子)

新山さん：「こんな学校来てへんし分からん」と大きな声で言う。

山本先生：「学校来てへんことを偉そうに言わんとって！」

新山さん：苦笑いを浮かべる。

山本先生が生徒たちに向かって、隣のクラスの富田君が、空気が読めないで周りの女子に注意をされていたという話をする。

三谷君：「うちは注意する女子がおらんからな」

八田君：「いや、女子がおらん」

三谷君：「やんちゃな女子もおらんしなあ」

山本先生：「いや、やんちゃする子は聞いたことあるけど。さっき、『学校来てへんし分からん』とか言うた人ちゃうかな。」

新山さんはニヤニヤしながら、周りの様子をうかがっている。

(南中フィールドノート：2009年10月2日)

生徒を「けなす」ことや、「いじる」ことは、南中教師がよくとるコミュニケーションの手段である。それぞれの教師のキャラクターや、教師と生徒の関係性にもよるが、生徒のほうもこうした教師の発言に対して特段気にしている様子は見られない。すなわちこれは、正直で裏がない子ども像が教師によって共有されているためであり、なおかつ、保護者からのプレッシャーが少ないことから、生徒の心を傷つけないようにするための過剰なまでの気遣いというものが、南中ではあまりみられないということを示していると言えよう。そしてそれは例えば、お互いの成績を見せ合いながら、「お前アホやな～」「お前のほうがアホやんけ」と言い合う生徒たちの姿とも重なっている。

また、授業中にこうした教師生徒間のコミュニケーションが多いことは、南中の授業の特徴でもある。北中と南中の授業の様子を比べた場合、どちらも教科書中心の一斉指導が主流であり、その形態や内容に関して両者の間にそれほど大きな違いは見られない。しかし、南中では、授業の内容からは少し脱線するような生徒の学校生活や家庭での出来事にまつわる日常的な知識や、教師のプライベートな出来事が披露され、それを共有することによって授業が進行していく場合が多い。それに対して北中では、教師と生徒の相互作用は比較的少なく、教師からの一方的な知識伝達のなかで粛々と授業が進行していく。南中では、教師と生徒双方によるプライベートな話題の共有が、授業を成立させる仕掛けにもなっており、授業以外の場面における教師と生徒の関係性が、こうした雑談を可能にしていると言える。

#### 4.2. 指導の主導権

保護者からのアカウントビリティの要請の強弱によって、両校の指導には、教師が主導権を握る指導か、生徒に合わせた指導かといった違いがみられる。Z市では、

## 公立中学校における「現場の教授学」

例年9月に開催されてきた体育大会を6月に実施する学校が増加してきており、現在、市内の半数の中学校は6月実施となっている。2学期は行事が重なることと、熱中症への心配がその主な理由である。

こうしたことから北中では、体育大会は6月に開催されるようになったが、南中では、9月開催のままである。南中でも、体育大会を6月に変更しようという案は、毎年教職員の中から出される。しかし、体育大会の目玉である組体操に力を入れたという体育教師の思いが強く、十分な練習時間がとれない6月開催案は見送られたままである。

次に示すのは、北中、南中それぞれの学校における体育大会の練習風景である。

体育教師の進行のもと、落ち着いた雰囲気で行進の練習が続けられていく。

しばらくすると、男子1名が集団から抜け、教師のもとに話をしにいった後、日陰で座り練習を見学。その後も次々と練習から離脱していく子どもたち。

……（中略）……

出川先生：「暑いなー……。9月やったらもっと大変やで」

筆者：「でも、脱落者多かったですよね。」

出川先生：「そやねん。昔やったら許さへんかったけど、親がうるさいからな」

筆者：「この辺りは外圧がきついですか？」

出川先生：「裕福になればなるほど、うるさくなるな」

（北中フィールドノート：2008年5月23日）

3年男子による組体操の練習。2人一組での演技から、全体でのピラミッドまで、かなり高度な技が続いていく。

大島先生：「はい、じゃあ今から3分間、ピラミッドの練習な」

黙々と練習する生徒たち。

大島先生：「3分たったぞー」

それを聞いた生徒たちから、「えーー」と、不満を投げかえる声上がる。

大島先生：「何が『えー』じゃ。俺が決めたんじゃ！」

生徒たちにどっと笑いが起こる。

……（中略）……

（北中でのフィールドワークについて、大島先生、西本先生と話す。）

大島先生：「北中はええ子が多いかもしれんけど、ここの子みたいに変わりはせえへん。よう知らんけど。19日（体育大会開催日）までのプロセスを見てほしいな。ホンマ目の色変わっていく。」

筆者：「北中は見学する子が多いです。」

西本先生：「はぁ！？そんなまずあかん。軟弱や一言うたりますよ。」

(南中フィールドノート：2008年9月5日)

北中では、もう少し厳しく生徒を統制したいという教師側の思いがありながらも、生徒に歩み寄らざるを得ない様子がみられる。一方南中はというと、生徒の甘えは許されず、教師が主導権を握る形で統制が図られている。とは言うものの、南中の練習風景は、非常に和やかなムードのなか行われていることも付け加えておく。

このように、教師中心か否かといった違いは、その他の指導場面についてもあてはまり、両校の指導のあり方を特徴付けるものとして理解できる。たとえば、学校安全の観点から、Z市内の各校の校門には鍵が取り付けられており、朝の登校指導が終わったのち、放課後まで施錠されることになっている。そのため、北中・南中ともに朝の本鈴後に登校してきた生徒は、インターホン越しに教師と話をし、職員室から遠隔操作でロックを解除してもらわないと学校に入れなくなっている。

北中では、インターホン越しに生徒の学年と氏名を教師が聞いた後、それが学年の教師に伝えられ、教師が下足置き場のところまで生徒を迎えに行くというスタイルがとられている。一方南中では、学年と氏名を聞いたのち、職員室まで来るように指示がされる。そこで、生徒指導担当の教師を中心に、遅刻の理由などについて問いただされることが通例である。つまり、教師が出向くのか、生徒に出向かせるのかといった違いがここには現れている。

以上のように、保護者のアカウントビリティの要請が強く、「最近は何でも子どものいいようにせなあかんしなあ」と語られる北中では、生徒に対する強要や押し付けは極力さけられているのに対して、南中では、教師中心で生徒を動かす指導スタイルがとられているのである。

また、主導権が教師側にあるのか否かということに関わって、生徒を統制する手法にも両校では違いがみられる。北中では、教師による生徒管理は比較的ゆるやかである。それは、服装指導に対する保護者からの疑問の声が大きいという側面だけによるものでない。日ごろ服装指導を厳しくしない理由について、「**言っ**て**関係が崩れることを恐れるというか。**」(北中フィールドノート：2009年6月5日)と語られるように、強制することによって、生徒との関係が崩れてしまうのではないかという不安感が教師の側にも存在し、それによってコントロールの弱さが生み出されてもいるのである。

また、次に示すように、何度も繰り返される「お願い」という言葉からは、教師

## 公立中学校における「現場の教授学」

の側からの命令的コントロールを極力避けようとする意図もうかがえる。

(1学期終業式の際、夏休みの諸注意についての話がされたときの様子)

「自転車で通学してきたりしていた人がいましたが、マンションとか、公園とか、駅とかにほったらかしていく人が多かったです。近所から苦情も来ました。やめて下さい。2学期からはそういうことのないようにお願いします。

それと、地域の山下さんという人から、学校に電話がありました。家の横を流れている川から、鯉をとったり、勝手にバケツをつかったりしている生徒がいるそうです。絶対にそういうことはしないように、お願いします。」

(北中フィールドノーツ：2009年7月17日)

一方の南中では、教師が生徒を激しく怒鳴っている場面は度々目にするものであり、それは、生徒よりも肉体的に優位な男性教師だけでなく、女性教師にもあてはまることである。また、同学年に所属する新任教師に対する浜村先生の話からは、生徒に厳しく接することで、心を動かすことができ、それが指導の醍醐味であると考えられていることがわかる。

「俺は、子ども泣かしたら勝ちやと思ってんねん。泣いたら、何か子どもに伝わったときやと思うし、指導が入るときやと思う。だから、あの手この手で泣かしたるな。」

(南中フィールドノーツ：2008年9月10日)

生徒と極力衝突しないように、緩やかに統制しようとする北中に対して、南中では、教師と生徒の立場をはっきりさせた上で、生徒との衝突も辞さないという姿勢が強調されているのである。

## 5. まとめと考察

本研究では、同じ市内に位置する2つの公立中学校におけるエスノグラフィックな調査から、現代の公立中学校における「現場の教授学」を比較検討してきた。それらをまとめたのが次の表2である。

北中と南中ではそれぞれ、生徒や保護者が異なる特徴をもつものとして理解され、そうした解釈に基づいて「現場の教授学」は形作られている。こうした両校の違いを社会経済的背景という枠組みから理解するならば、次のようなことが考えられるだろう。まずは、欧米の研究を中心としてこれまでに積み重ねられてきた家族の階級文化による子育て様式の影響である。「個性志向家族」と「地位家族」(Bernstein 訳書, 1981)といった家族類型に付随し、推論的で子どもの自主性を尊重する中産階級と、命令的で権威への同調を求める労働者階級といったように階

表2 北中と南中の比較

生徒の特徴		保護者の特徴	現場の教授学	
			教師-生徒関係	指導の主導権
北中	きどっている、冷めている 何を考えているのかわからない 教師と交渉する	子どもの教育への関心が高い アカウンタビリティの要請が高い 親子の地位関係が曖昧	制度的役割関係 生徒を傷つけないよう配慮 授業中のコミュニケーションは限定的	生徒に対する強要や押し付けの回避  ゆるやかな統制
	ひとつつつこい 正直 権力に弱い	学業達成への関心が低い アカウンタビリティの要請が低い 親子の地位関係が明確	情でつながる関係 生徒をけなす、いじる 授業中のコミュニケーションが豊富	教師中心で生徒を動かす  生徒とぶつかる

級によってしつけの様式には違いが現れる (Kohn & Schooler 1983)。そして、こうしたしつけのあり方は家庭内だけにとどまらず、子どもが家庭の外の世界に出たときにも影響を及ぼすものになり、「労働者階級の子どもは、家庭で命令的なしつけを受けているため、専門家とのやりとりにおいても同じような反応をする」(Lareau 2003) というように、親子の間で築かれたやりとりが、医師や教師といった専門家とのやりとりにおいても再現されるとの指摘がされている。

また、保護者の学校への関わり方という点についても、子どもの全面的発達に向けて力をつくす「計画的な生育」という中産階級の子育て様式と、「自然な発育を見守る」という労働者階級の子育て様式の違い (Lareau 2003) に関連し、労働者階級の親は、学校に対して不信感をもっている一方依存的であるのに対して、中産階級の親は自分の子どもの利益になるよう学校に要求をつきつけ、教育環境を自分たちの好みに合うようにカスタマイズする (Lareau 1983) とされている。すなわち、北中と南中における生徒や保護者の特徴の違いは、こうした家庭の階級文化の違いによってもたらされているものとして捉えられる。

これに加えて、現代的な人間関係上の規範の浸透度合いが、階層によって異なることの影響も考えられる。土井 (2004) は、自分の想いを優先しそれをそのままストレートに発露することを「素の自分の表出」とし、相手との関係性をまず優先しその維持のために自らの感情に加工を施して示すことは、「装った自分の表現」と呼んでいる。そして、親密な関係にある間柄においても後者を優先させなければならず、お互いの対立点をできるだけ顕在化させないように、過剰なまでの配慮を必要とする「優しい関係」の蔓延が、現代における人間関係の特徴であるとする。



## 公立中学校における「現場の教授学」

北中と南中，双方の教師—生徒関係について考えると，北中の方では確かに，こうした現代的な人間関係の特徴はあてはまる傾向にあると言える。「装った自分の表現」を重視する生徒や保護者に対応するために教師の方も役割演技を行い，両者の間には一定の距離が保たれながら関係性の構築がなされている。しかしながら，南中の方とは例えば，「素の自分の表出」を行う生徒や保護者が多いために，教師も自らの想いを生徒にストレートにぶつけ，それによって教師と生徒という役割演技を超えた人間的な関係性を築こうとしている。「傷つきやすい子ども」といった見方は，北中では現代の子どもを表す際のある程度妥当な表現として使用されるが，南中では，そうした枠組みで生徒を見ることはあまりない。つまり，「優しい関係」あるいは別の言い方をすれば，「人格崇拜規範の厳格化」（森 2000）といった現代的な人間関係上の規範は，特に中産階級層を中心に浸透してきているのであり，そうしたことが，「現場の教授学」に違いを生じさせる要因になっていると推測される。

以上のようなことから，たしかに，北中のような学校では「コンサマトリー化」が進行しつつあり，「現場の教授学」にもポストモダンな変容がもたらされているようにも見える。北中には，学校の秩序を大きく乱すことのない大多数の生徒がいる一方で，一部には教師との対立を繰り返す生徒もおり，そうしたかれらの存在は北中ではひどく「浮いた」ものになっている。度々授業をエスケープしたり学校を早退したりする生徒に対しては，空き時間の教師がついてまわることによって，集団とは別立ての対処が行われている。そしてこれは，吉田（2007）が高校において観察したような「ぶつからない統制システム」と「お世話モード」に類似するものである。

一方，筆者が訪れるようになった2006年からの数年間は，比較的落ち着いた安定期に入っていた南中では，志水（1991）が20年前に観察したものとほぼ変化のない形で指導が展開されている。「つながる指導」は，生徒と教師の情緒的絆を基盤にしており，その意味では「お世話モード」にみられるような個別の対処の戦略と似通っているようにも見える。しかしそれは，心理主義化の影響による生徒のありのままを受け入れるものというよりは，「しんどい層」を学校に取り込むために，20年前にとられていた方略とほぼ同じものとして考えられる。家出を繰り返し，数週間ぶりに学校に登校してきたある男子生徒は，南中の指導について尋ねた筆者の質問に対して，市内の他の中学校と比較しながら次のように答えている。

**筆者：「服装とか，南中結構うるさくない？」**

小田君：「そうかな？中里中なんかは、服とか髪の毛の長さとかうるさいけど、南中はとりあえず親呼ぶ。向こうはそのまま帰らすし、直さんとそのまま（学校）行かへんかったりとか」（南中フィールドノート：2007年11月9日）

南中教師によって「ファジーな生徒指導」と表現されるように、南中では、服装や頭髮に関するルールはそれほど事細かに取り決められてはいないものの、ある一定のラインを超えた場合には厳しく指導がされる。そしてそれは、あくまでも学校のなかで行われるものなのである。つまり、問題を抱える生徒を学校から排除しようとするのではなく、かれらはあくまでも学校のなかでの指導の対象として捉えられていることが分かる。そしてそこには、「打てば打つほど響く」という教育可能性への信念による裏打ちが存在している。

以上のように、市場化や現代的な人間関係上の規範といった社会的要因は、校区の階層文化に媒介されてそれぞれの学校に持ち込まれるのであり、そこに生じる階層差によって、「学校のコンサマトリー化」の進行には違いが生じている。さらには、教師が生徒の文化に歩み寄る形で「現場の教授学」を構築することによって、北中では「コンサマトリー化」が促進されていると捉えられるのに対して、南中では、あくまでも学校の中での指導の対象としての子ども像の共有と、問題を抱える生徒を集団のなかへと包摂しようとする試みによって、「コンサマトリー化」の進行に歯止めがかけられているとも考えられる。

本研究では、「現場の教授学」を形作る要素として校区の階層文化による影響に焦点をあて検討を行ってきたが、ここで描き出したのはあくまでも2つの中学校で観察された主流の学校文化であり、むろん個々の教師がそれまで培ってきた指導方針とのズレによる葛藤はみられる。しかしながら、「現場の教授学」が、それを語ることにメンバーシップ確証の手立てになる（古賀 2001, p.130）という性質をもっているように、生徒や保護者の特徴についての認識が教師によって語られていくことを通して、北中・南中双方の場の文脈に応じた指導のコンセンサスが、一定程度得られていると言える。

また、ここでの生徒・保護者像は、あくまでも教師によって語られている言説上のものであり、それがどこまで現実の生徒・保護者像と合致するものであるのかは、注意が必要である。この点については、生徒や保護者に対するインタビューなどを通して明らかにしていく必要があり、より重層的な理解をしていくための課題として残されている。しかし、本稿で着目したのは、「現場の教授学」を形作っているのがあくまでも教師の解釈であるという点であり、それは時として、現実の子ども

## 公立中学校における「現場の教授学」

や保護者の姿を見誤る可能性を含んでいるとも言えるだろう。

## 〈注〉

- (1) 本稿では、北中・南中以外に登場する学校名のうち、「キタの学校」と判断されるものは北〇中、「ミナミの学校」は南〇中、中部の学校は中〇中という仮名で表記している。これは、Z市の教師たちによって、市内の他の学校での勤務経験をもとに現在の勤務校の特徴が語られること、特に、「キタ」の学校であるのか「ミナミ」の学校であるのかが、子どもや保護者の特徴を言い表す際の準拠枠になっていることを示すためである。

## 〈引用文献〉

- Becker, Howard, S., 1952, "Social-Class Variation in the Teacher-Pupil Relationships", *Journal of Educational Sociology*, Vol. 25, No. 8, pp. 451-465.
- Webb, John, 1962, "The Sociology of a School", *The British Journal of Sociology*, Vol. 13, No. 3, pp. 264-272.
- Bernstein, Basil, B., 1971, *Class, Codes and Control*, Routledge & Kegan Paul. (= 1981, 荻原元昭訳『言語社会化論』明治図書出版).
- 土井隆義, 2004, 『「個性」を煽られる子どもたち』岩波書店。
- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』第70集, pp. 89-103.
- 古賀正義, 2001, 『〈教えること〉のエスノグラフィー』金子書房。
- , 2008 「学校研究の現在」『教育学研究』第75巻, 第1号, pp. 46-54.
- Kohn and Schooler, 1983, *Work and Personality*, UT Back-in-Print Service.
- Lareau, Annette, 1989, *Home Advantage*, Falmer Press.
- , 2003, *Unequal Childhoods*, University of California Press.
- 森真一, 2008, 『ほんとはこわい「やさしさ社会」』筑摩書房。
- 大和田直樹, 2000, 「生徒文化——学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, pp. 185-205.
- 志水宏吉・徳田耕造, 1991, 『よみがえれ公立中学』有信堂高文社。
- 総務省統計局, 「平成17年国勢調査の結果」<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/kekka.htm>
- , 「平成19年就業構造基本調査報告」<http://www.stat.go.jp/data/shu->

gyou/2007/index.htm

竹内洋, 1987, 「職業高校の学校内部過程」『京都大学教育学部紀要』第33集, pp.24-47.

Willis, Paul E, 1977, *Learning to Labor*, Ashgate Publishing Ltd, (= 1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房).

吉田美穂, 2007, 「『お世話モード』と『ぶつからない』統制システム」『教育社会学研究』第81集, pp.89-107.

**ABSTRACT**

**“Local Pedagogy” in Japanese Middle Schools:  
Focusing on the Socio-Economic Backgrounds of School Districts**

**ISA, Natsumi**

(Nara University of Education)

Takabatake-cho, Nara-si, Nara, Japan

E-mail: isanatsumi@yahoo.co.jp

The aim of this paper is to examine the concept of “local pedagogy” in two middle schools in relation to the socioeconomic background of their school districts. Further, it aims to clarify the impact of social class culture on the “consummatorization of schooling.”

I selected two middle schools located in a single city, and continued fieldwork research for two years in the first school, which I have called Kitachu, and for four years in the second, Nanchu. There is a relatively large number of middle-class students at Kitachu, and Nanchu has a large number of working-class students.

At each school, the teachers understand that their students and their parents have special characteristics. Students of Kitachu are careful about human relationships and often negotiate with the teachers, and the requirements of their parents toward the school are sometimes stiff. At Nanchu, the students are friendly, honest and compliant toward authority, and their parents’ demands for accountability are not strict.

Based on teachers’ understanding of their students and parents, the teachers construct a different “local pedagogy” in each school. In, Kitachu, the teacher-student relationships are not close and teachers avoid coercing students or giving them orders. By contrast, in Nanchu, the teachers tend to take the initiative and teacher-student relationships are very close. In other words, a “consummatorization of schooling” is taking place in Kitachu, but not in Nanchu.

These differences can be understood as follows. First, post-modern changes such as marketization and contemporary rules about human relationships began to spread especially among middle-class people. As a result, there are differences between social classes regarding how they bring those values into schools.

Second, “local pedagogy” in Japanese school is constructed through compromises between teachers and their students’ class cultures, thereby facilitating the “consummatorization of schooling.”

**Keywords: Local pedagogy, Socio-economic background of school district, Consummatorization of schooling**